自然体験を日常へ

おやま から
うまれたあそび

三田市有馬富士自然学習センター

こつぶっこ

０～３さいのしぜんあそび

開催：2020 年 6 月～
平日月 1 回開催（主に第 1 木曜日）
10：30 ～ 11：30（随時受付）
定員：20 名
場所：有馬富士公園（主に、築山広場・雨天時は館内）

兵庫県立有馬富士公園で開催する当館のプログラム「こつぶつこ」（2020 年度～2023 年度） の５つの自然遊びから日常の中で自然と遊ぶヒントをご紹介します。

当館について

三田市有馬富士自然学習センター
（キッピー山のラボ）

三田市有馬富士自然学習センターは、兵庫県立有馬富士公園の中にある施設です。2001年4月有馬富士公園の開園と同時に開設されました。開設以来、キッピー山のラボの愛称で親しまれています。当館では、現在(2024.3時点）、専任のスタッフ（コミュニケーター）が6名在籍し企画運営を進めています。兵庫県立有馬富士公園や三田市の自然をより身近に感じてもらうことを目的として、イベントや展示、人材育成など様々な事業に取り組んでいます。

自然と出会い
心が動くきっかけづくり

私たちは、子どもが主体的に体験することに学びがあると考えています。子どもたちが自然と出会い、本物の生きものを知り触れることで、心が動くきっかけづくりを行っています。

ここでのひとつひとつの日常的な自然体験により、子どもが自然とのかかわりを学び、心豊かに成長していくと捉えています。

育ちに応じた自然体験

当館ではおもに幼児期、小学生、中学生を対象としたイベントを実施しています。人材育成まで含めると、高校生までの幅広い年齢層に向けた事業を展開しています。年々、平日を含めた公園の家族利用が増加しており、乳児期の子どもたちの体験ニーズが高まっていることから、2020年度より、0～3歳を対象としたイベントを試行することとなりました。

０～３さいのしぜんたいけん

人の育ちの土台となる0～3歳の時期に、自然にふれることは大変意味があると考えています。また、保護者にとっては、この時期の子育てを通して、ゆっくり自然の中で過ごすことのできる絶好の機会です。当館のイベントへの参加が、ご家庭での日常的な自然とのかかわりへと繋がる貴重な機会となると捉えています。

「こつぶっこ」について

当館での0～3歳を対象としたイベントは、ふたりのコミュニケーター—の出会いから、始まりました。開始直後は1家族のみの参加の回もあり、内容も毎回手探りの試行錯誤でした。対話を重ね、改良を重ねながら、ここまで実施を継続することができています。今では様々な親子連れで賑わい、リピーターとなり継続して参加いただく方もいます。今回は、この4年間の取組みで登場した５つの自然遊びを題材に、子どもの遊ぶ姿から体験についてふりかえり、0～3歳の自然体験の大切さを伝えていきたいと思います。

【場をつくる人】

コミュニケーター—
長谷川　真奈維　（はせるん）

キッピー山のラボ（三田市有馬富士自然学習センター）に11年勤務。年間500名以上の園児・小学生の環境体験学習をガイドする傍ら、「0～3歳のしぜんあそび～こつぶっこ～」、「4～6年生のためのジュニアスタッフ」などを担当。0～3歳に届く自然体験を日々模索している。保育士。

コミュニケーター—
山中　詩子　（うたこさん）

発想としての＂遊び＂に着目し、乳幼児期の子どもの遊びの環境づくりに長年携わる。こどものための博物館や保育園など様々な場で実践を重ね、当館のコミュニケーター—に4年在籍。携わった企画は、#お山はあそびラボとしてHPに紹介。暮らしの中での＂遊び＂の可能性と、自然と表現のつながりを探究している。
社会福祉士。

たいけん
01

日常につながる自然遊び
～遊びのヒント～

くさばな と あそぼ！

子ども と くさばな

冬から春にかけて刻々と移り変わるように現れる植物に、一緒に立ち止まり、目を向けることから遊びは始まります。やわらかな春の小さな草花は、子どもの目線に近いところにあり、自ら手を伸ばして摘むことができます。草花摘みを通して昆虫などの生き物との新たな出会いもうまれます。

野原は、こもれびや風の心地よさもあわさって春の空気感に包まれます。

よく遊んだ くさばな

【2022 年 4 月 8 日（木）の場合】

ヒメオドリコソウ・ホトケノザ・カラスノエンドウ・オランダミミナグサ・コハコベ・タネツケバナ・キュウリグサ・タンポポ・カタバミ・コメツブツメクサ・レンギョウ・ツルニチニチソウ

子どもから
うまれた遊び

指先から感じる春

草花は指先をいっぱいつかった遊びが楽しめます。自分で何度も繰り返すことによって、草花の特徴をたくさん指先から吸収しているように思います。春の季節ののびやかさを肌で感じる体験です。

お水に草花を浮かべる

花のはいった透明のボトルに水をいれると、光にすけた花びらがゆらゆらゆれて見え方が変わります。じっくりみた後、ふったり、転がしたりと遊びが広がっていきました。

ばらばらにして並べる

草花をちぎることに夢中になる姿をみて、まな板を手渡すことにしました。お母さんが傍らで寄り添いながら一緒にひとつひとつ種類ごとに丁寧に並べていました。

とけだす草花をながめる

製氷器にいれて草花をこおらせた氷は、しばらくすると溶けて中から草花がでてきます、中からでてきた植物に指先でふれ、その後の興味につながっていきました。

日常の遊びのヒント

自分で摘んだ草花で遊ぶことで、より一層植物が身近なものとなりますね。

子どもがじっくりみつめる、かかわる一工夫をすると、子どもから遊びがうまれていきます。

たとえば、お家にある空のボトルや容器、まな板などを組み合わせるとこんな風に遊びが広がっていきますよ。草花ごおりのつくりかたも HP に掲載しています。
ぜひ遊んでみてくださいね。

たいけん
02

日常につながる自然遊び
～遊びのヒント～

はっぱ と あそぼ！

子どもと はっぱ

木の葉っぱは、一見身近なようで、なかなか出会えないものかもしれません。それは、目の高さより高いところにあること、公園などとってはいけないところが多いということも関係しています。一方で、若葉、夏の青々とした葉、紅葉、落ち葉と四季を通しての変化を感じることができる魅力があります。また､葉っぱには虫の食べた穴（形跡）があり、自然界では、様々なことが関連していることを伝えてくれます。

よく遊んだ はっぱ

【2023年7月6日（木）の場合】
《葉っぱ遊び》サルトリイバラ・コナラ・アラカシ・アオキ（斑入り）・アカメガシワ・ヒメコウゾ・ヒサカキ・ヨモギ・ミツバアケビ

《草花ごおり》ウリカエデの実・シロツメクサ（クローバー）の花と葉・ヤマボウシの実・アベリアの花・ブタナの花、ミヤマガマズミの実・ヘビイチゴの実・オオニワゼキショウの花・ニワゼキショウの花・ヒメジョオンの花

子どもから
うまれた遊び

触れて深まる認識

実際に手に触れて遊ぶことで、葉っぱの様々な形状や質感の違いを知ることができます。また、四季を通して変化していくことを､葉っぱと遊ぶことで実感できます。何度も繰り返し満たされるまで行うことで、子ども自身の力で認識を深めています。

いろんな葉に触れる

数種類の並んだ葉っぱで遊んでいるうちに､葉っぱが くしゃくしゃになったり、ちぎれたりします｡ふと自分の手にうつった葉の香に気づきそっと匂いをかいでいました。

霧吹きで水滴をつくる

数種類の葉っぱに霧吹きにはいった水を吹きかけ、水滴ができると不思議そうにみつめていました。別の葉っぱではどうなるか探索は広がります。

布にのせて動かす

布の上に葉っぱをおき、布をゆらゆらゆらしたり､ぱたぱたはためかしたり。自分の動きによって葉っぱが動き、時には舞いあがったり。体全身つかって葉っぱと遊んでいます。

日常の遊びのヒント

はじめてのものに触れる時のドキドキも大切な体験です。子どもから触れる瞬間を大切に待ってあげたいものですね。

葉っぱを無地の布や紙のうえに並べると、子どもが少し距離をとり、眺める時間をゆっくりもつことができます。保護者の方がさわって遊ぶ姿をみてもらうのもいいですね。

自分で選ぶ・決める時間があるかどうかは、その後、子どもの遊びを大きく変えていきます。

たいけん
03

日常につながる自然遊び
～遊びのヒント～

むしさん と あそぼ！

子ども と むしさん

屋外で活動していると、虫との出会いは不意にやってきます。子どもは予測不能な動きをする未知なる存在に戸惑いを感じながらも、好奇心が上回り、次第に距離が近づいていきます。虫は生きていることを、実際に見て触れることから実感できます。
また、自然環境が虫の棲み処であり、自分たちの方がおじゃましているのだという自然の捉え方を体感していきます。

よく遊んだ むしさん

【2022 年 6 月 2 日（木）の場合】
ナナホシテントウ・オカダンゴムシ・ショウリョウバッタの幼虫・ハラヒシバッタの幼虫・クロヤマアリ・ゴミムシの仲間・ヒメアシナガコガネ・コガタルリハムシ・ヒラタシデムシの幼虫・ゾウムシの仲間・フトミミズの仲間

子どもから
うまれた遊び

生きものへの興味の芽生え

用意された虫にはさほど興味を示さなかった子も、草原から突然あらわれる蟻や小さなバッタは、距離をはかりながらもじーっとみています。食べているところ、うんちをしているところなどに出会えると、興味をもつ姿もみられました。

大きな虫かごをのぞく

大きな虫かごにはいった虫たちに興味津々。最後に逃がすためにファスナーを外すと、中にいる虫たちが気になってしゃがみこんでのぞいています。

手のひらにのせる

手のひらに小さなバッタをのせて、じーっと見ています。親子で手から手にそっと移動させていました。

透明カップでつかまえる

マットの上を歩く蟻をみつけました。目で追いかけて透明カップをかぶせてつかまえています。

日常の遊びのヒント

ペットボトルで手作りする「バッタゲッター」は小さなバッタや虫をつかまえてよくみるのに大活躍するアイテムです。" ひょうごエコロコプロジェクト " の HP でつくり方が紹介されています。

その他にも虫を直接さわることが難しい場合は、透明カップがつかえます。虫をつかまえた後、よくみることができ、子どもと虫の距離が近づくお散歩アイテムとしておすすめですよ。

たいけん
04

日常につながる自然遊び
～遊びのヒント～

どんぐり と あそぼ！

子ども と どんぐり

どんぐりは、子どもの手の中におさまる大きさと、独特な丸みが魅力です。目の前の手に届く範囲の中で転がるため、子どもたちはいつまでも遊べます。集めることができ、おままごとへの親和性などを高めているように思います。

たくさん遊んだ体験が子どもたちのどんぐりへの愛着をますますうみだしていきます。

よく遊んだ どんぐり

【2020 年 10 月 1 日（木）の場合】
クヌギ・アベマキ・マテバシイ

子どもから
うまれた遊び

夢中で遊ぶ満足感

どんぐりと遊ぶ子どもたちはどの子も集中していて長い時間夢中になって黙々と遊んでいます。何度も何度も同じことを繰り返しじっくり満足いくまで遊んでいきます。

ひたすらうつしかえる

どんぐりを一粒ずつ容器に移し替えていっぱいにしていく、並べた容器がふえて嬉しそうでした。

一粒ずつ移動させる

レンゲでどんぐりを一粒ずつすくい、慎重に容器に移動させることに集中しています。移し替える容器で音の違いを楽しんでいました。

いっぱい並べる

どんぐりを紙粘土におしあて一粒ずついっぱいになるまで並べては、指ではじくように外し、後にのこった穴にまたいれることを繰り返していました。

日常の遊びのヒント

お散歩の時になにかひとつポケットにしのばせて、持っていくとしたら…と、子どもに手渡すおすすめのアイテムをよくたずねられます。

どんぐりの時に大活躍したプラスチック製のレンゲもそのひとつです。子どもがにぎりやすく、どんぐりをすくったり、かきませたり、運んだり、並べたり…とひとつアイテムがあることで、いろんな動きが広がっていきます。いつものお散歩に " プラスワンアイテム " をお試しくださいね。

たいけん
05

日常につながる自然遊び
～遊びのヒント～

いし と あそぼ！

子ども と いし

石は、道端や公園など身近な場所に落ちています。年中、ある程度の形を保ち、ある場所にとどまり浸食には時間がかかります。これは生きものとの大きな違いです。変わらずひとつの場所にあり、形も変わりにくく、かつ、日常的に出会えるものです。繰り返し手にとり自分からかかわりをもつことができます。また、足元の石は目に飛び込んできやすく、自分で見つける自由度の高い石は子どもの遊びにつながりやすいもののひとつです。

よく遊んだ いし

子どものてのひらにおさまる範囲で大中小の小石。色や形・質感の面白い石に分類して準備。例えば、ハート石、しましま模様の石、つるつるの石、〇〇に似た石（お肉・きなこもち、鮭おにぎりなど）、硬さの異なる花崗岩、チャート、泥岩など。ある程度の量があると遊びが広がるため、1 人に対して 30 個程度を目安。事前によく洗って乾かしたものを使用。

子どもから
うまれた遊び

創意工夫する面白さ

容器に移し替えたり、並べたり、透明なホースに一粒ずついれて出したりと夢中になって繰り返していました。トングやレンゲなどの道具をつかって移動させたり、おままごとの食材に変身します。
子どもたちにとって、好きなものに囲まれる幸福感と身近な石とたくさん出会える非日常感があったようです。

石の音をきく

口にいれてしまう可能性のある子には、小さなペットボトルの容器にいれて手渡すことにしています。振って音を楽しんだり、石の動きをじっと見ていました。

透明ホースにつめていく

透明のホースに一粒ずつ石がはいるかどうか試しながら、いっぱいにしていくことに集中していました。はいるかはいらないかだんだん見極めて選んでいました。

もちあげる・はこぶ

トングで石をはさんで持ち上げれるか何度も繰り返していました。そのうち石をトングで移動する遊びがうまれていました。

日常の遊びのヒント

容器の種類を複数用意しておくと、石を集めたり、移動させたりすることから、「音」への興味につながり新たな遊びがうまれやすいです。特に空き缶や箱は音の変化が楽しいだけでなく、投げるのではなく、丁寧に移動する、並べるなどの子どもたちの興味につながりやすく、固い石をとりあつかう時の危なさがやわらぎます。

今なにを楽しんでいるのかな？とお子さんの様子をよくみると、手渡す道具がひらめくかもしれませんね。

場づくり
ポイント

0～3歳の子どもの
自然体験の場をつくる

" 場をひらく " エッセンス

遊びは本来子ども起点にうまれるものです。
特に 0～3 歳の子どもにとって、その場で体験する出来事は初めてであることが多いです。子どもの中でおきている心の動きや発見は、体験としてとても意味深いものです。そのため、設定した場では、子どもが好奇心にもとづき動ける環境をいかにつくれるかがとても大切です。「こつぶっこ」では、自由度とゆるやかさのある場をこころがけました。私たちの取組みから、0～3 歳の自然体験の場づくりのポイントをいくつかご紹介します。

" 場をひらく " エッセンス

素材
安心安全に向けて
の事前準備

道具
好奇心を
引き出すしかけ

時間
夢中になる
1 時間をつくる

空間
自由度をうむ
環境の工夫

「こつぶっこ」は当日受付の月 1 回のイベントです。毎回、始まるまで誰が何人くらい集う場になるかはわかりません。そのため、" 場をひらく " 心構えが迎える側には必要です。子どもと保護者が「なんだか楽しそう。やってみたい！」と直感的に思えるようなワクワク感と、自分のリズムでかかわれる遊びの選択肢と、自分で遊びをつくりだせる自由度が場の雰囲気としてあることが大切です。安心感をもってもらうための事前準備がとても重要となります。

「くさばなとあそぼ！」の場合

素材

実際に遊んだ植物は
当館の HP（活動報告）
「キッピー日記」をご覧ください。

～安心安全に遊ぶための素材選び～

子どもが口にいれて確かめることは成長の大切な経験という前提で、草花を選びます。とがっているものや、手が切れないもの、くさすぎないもの（刺激が強すぎないもの）、毒性がないもの等を事前下見し、吟味しています。また、子どもたちのその時の興味や関心によって遊び方は変化するので、色・かたさ・やぶりやすさ・匂い・質感（感触）などをさらに組み合わせ、当日に遊ぶ植物は決まります。

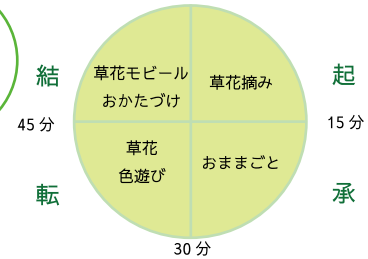
道具

～好奇心を引き出す道具選び～

出会いの瞬間が遊びとなる道具選びを工夫しています。例えば、草花遊びでは、口がせまくにぎりやすい透明なボトルが大活躍します。自分で摘みとった草花が容器に入る様がわかり、入れることに集中力がいるので、はいった瞬間の喜びが高まるようです。ピクニックに出かけるような自然素材の小さなかごでの草花摘みは可愛いと保護者に人気です。親子での体験に喜びを感じるちょっとした演出も大切な要素です。

時間

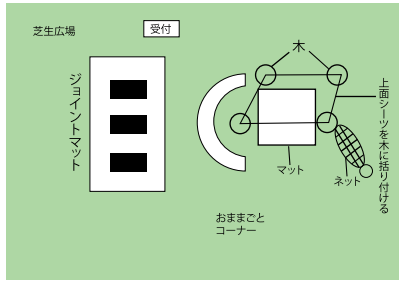
【例）2022 年 4 月 6 日】



1 時間の時間を起承転結に 4 分割し、15 分目安にその場で中心となる遊びを予め想定して当日に向けての準備をします。これは、時間通りに進める目的ではなく、当日受付で集う子どもの様子にできるだけ寄り添うためのものです。運営する 3 名のスタッフ間で共有し、臨機応変に対応しやすいので、場にゆるやかさをもたせることができます。また、屋外ならではの偶然性（虫があらわれたり、風がふいたりなど）を即興的に組み込む余裕につながります。

空間

【例）2022 年 4 月 6 日】



築山広場の空間づくり（図解）

子どもが場の中で、自分起点に動けることと自分で選択決定できることはとても大切です。そのため、遊びが選択できることと、個々の子どもがそれぞれ夢中になれるスペースづくりを心がけています。晴れの日の開催場所は、原っぱの広場であるため、遊ぶ空間を大きく捉え、動的な遊びと静的な遊びでゾーンをわけ、また、草花摘みなどを続けて自由に行えるよう拠点となる場の位置を決めています。

場つくりポイント

0〜3歳の子どもの自然体験の場をつくる

月1回の場が続くつながり

イベントというかたちで、子どもたちの自然体験の場をつくる上で大切なもうひとつの要素は、継続してその場を持ち続けることです。
特に 0〜3 歳の子どもたちにとって、その場での興味や気づきが、その後、子ども自身の中で広がり深まっていくには時間の経過が必要です。

Aちゃんのジュースやさんの遊びより

《はじまり》 2021 年 4 月 15 日（木）
この写真は、1 歳をすぎた頃に初めて「こつぶっこ」に参加してくれた女の子（以下、A ちゃん）の植物との出会いのシーンです。
その後の A ちゃんの遊びの姿から、時間の経過と共に広がる 0〜3 歳の子どもの体験について考えます。

子どもの体験から場づくりを考える

A ちゃんは、その後、3 歳で幼稚園に入園するまでの間、「こつぶっこ」をはじめ、当館にご家族で日常的に遊びに来てくれていました。今も引き続き、土日にいろんなイベントに参加してくれています。

2021 年 5 月 13 日（木）

翌月の参加の回で、水のはいったボトルに再び出会う A ちゃんと、この日は最後に、実際に中身のお水を出すことができました。

2022 年 5 月 12 日（木）

「ジュースやさん」の遊びは、その後続けて広がっていきます。水がなくても容器があれば、ご家族での定番の遊びとなっていました。

2022 年 6 月 2 日（木）

さくらの実の色水遊びでは、容器をふると色が濃くなっていくことを発見しました。自分の色をよく覚えていて並んだボトルの中から、「これ、A ちゃんの。」と覚えて教えてくれました。

2022 年 8 月 4 日（木）

草花をこおらせた氷の遊びでは、とけだした水をみて「ジュースになった！」と驚いて、木の棒でかきまぜ続けていました。

2023 年 4 月 6（木）

「こつぶっこ」の最後の参加の時の様子です。ボトルの中に自分で草花を色別にわけたり、お水を加えたりしていました。ジュースをつくって乾杯して飲む真似をしているところです。

季節を変えて長い時間をかけて広がる遊びを通して、A ちゃんが自然と仲良くなり、自分で創意工夫しながら新たな面白さを広げていく様子が伝わってきます。イベントでのふとした体験がきっかけとなり、こんな風に広がりをもって子どもの中で育まれていくことを A ちゃんが教えてくれました。大好きな遊びは A ちゃんにとって、コミュニケーターや同世代のお友だちといった人との距離も近づけていきます。繰り返し遊ぶことで、自然や人と仲良くなり、また、保護者のお話からご家庭での遊びにも繋がっていったようです。0〜3 歳を対象とした場づくりが、単発ではなく、継続していくことの意義深さを感じます。こうした継続的な体験の積み重なりが、子どもの日常と自然体験をつないでいく上で大切であると改めて考えさせられました。

【保護者の声】

1歳過ぎで初めて参加した春の季節、ボトルにお花とお水をい入れてジュースに。それをマットの即席すべり台で転がしたり、ぽーんと投げたり。太陽の光でお水がキラキラ、ボトルの中のタンポポの黄色がとても鮮やかで、投げるのも落ちるのも楽しくて夢中になって追いかけていた娘の表情になんだか感激したのを覚えています。その頃は玩具も絵本もこれは手放せないぞという物がなく。この子は何が好きなんだろう？どんなことを一緒にしたら喜んでくれるのかな？と思っていた時期だったので、こんなに目をキラキラさせて楽しんでいる姿が見られるならまた次も「こつぶっこ」に参加してみよう！と思ったきっかけでもありました。月齢を重ねてもお水遊びが好きで、濾紙につぶした木の実でお絵描きしをして、その潰した木の実とお水をボトルに入れての色がが変わる色水遊び。透明なお水がシャカシャカ降ると大好きなピンク色に変化。大きいお友だちに混じって小さな声ながらも木の実をもっとちょうだい！と自己主張も少し出来るようになってきました。うたこさんが小さな声の娘に対して、「A ちゃんの声がもっと聞きたいな〜」と背中を押してくれたことをよく覚えています。
娘の成長と皆が作ったボトルが 1 列に並べられたのを見てなんだか温かい気持ちになったことを覚えています。

場つくり
ポイント

0〜3歳の子どもの
自然体験の場をつくる

保護者と共に

「こつぶっこ」が現在定着継続したのは、参加する保護者の理解と親子で遊ぶ姿があるからです。子どもの様子を見守りながら、共に楽しむ気持ちをもった周囲の大人の存在は、子どもの遊びを体験へと変えていきます。場のあたたかな雰囲気はみんなでつくりあげたものだからです。

会話からはじまる場づくり

特に開始 1〜2 年目は、保護者の方とお話しながら毎回の内容を試行錯誤していました。イベントを開催している私たちの想いを伝えたり、どんな遊びをご家庭の中でしているかなど会話の中で次回の内容を検討していく期間でした。リピーターとなった保護者の方々が、私たちの用意したものをつかって、お子さんと一緒に遊びをつくりだしてくださいました。それらの姿が、新たに参加した他の保護者に対して、この場での「体験」について語ってくださっていたように思います。

親子の交流から場づくりを考える

「こつぶっこ」での活動写真の中から改めて親子の交流をふりかえってみると、子どもは安心した表情で夢中になって遊び、自分の発見を一生懸命に伝え、一緒に遊ぶことを喜んでいる姿が伝わってきます。0〜3歳の子どもたちにとって、親子で共にその場にいること自体が体験を広げ深めているように感じました。また、子どもの体験をそっと傍らで見守るような関わりをされる方が多く、私たちコミュニケーターも寄り添い方の気づきが沢山ありました。また、「0〜3歳の自然と遊べる場を探していた。」、「子どもが何に興味を持っているかがわかり、どんな風に遊ぶかの参考になった。」、「家庭での遊びにとりいれている。」、「異年齢の子の姿がみれて嬉しい。」、「0 歳から遊びに行ける場は貴重！」などの保護者の方々からの声は、当館でのこの取組みの意義を強めていただいています。「子どもの頃、こんな風にお花を摘みました。」などの自身の自然体験の回想や、「葉っぱっていろいろあるんですね！」などの自然へのみかたにもつながっておられる様子を嬉しく思います。私たちが 0〜3 歳の子どもにとっての自然体験とはなにかと試行錯誤していたことが、保護者の皆さんにとって、ご自身の「子ども」を理解する場や日常的な子どもと過ごす居場所のひとつとして捉えてくださっていることにも気づかされました。当館は、育ちに応じた自然体験ができる機会がたくさんあります。ご家族での豊かな自然体験から、日常の自然との関わりが増え、将来子どもが自然への愛着をもった人として成長してほしいと願っています。

自然と遊ぶことからはじめよう。

0〜3 さいのしぜんあそび

こつぶっこ

キッピー山のラボ HP

「こつぶっこ」もっとくわしく！

自然体験を
日常へ

「こつぶっこ」をふりかえる

0 ～ 3 歳の自然体験
はじめてを教えてもらう時間

三田市有馬富士自然学習センター
(キッピー山のラボ / コミュニケーター)
長谷川　真奈維

私にとって開始1年目は0～3歳を理解するための試行錯誤の時期でした。しかし、この3年間で0～3歳の子どもたちとのかかわりをより多く持てたことで、発達段階に合わせた遊び方がわかるようになりました。0～3歳の身体の発達は、遊びと直結し、遊びを通してできることが増えていきます。

こつぶっこで、参加者が自然への楽しいかかわり方を知り、それが、親子でのはじめての体験として受け入れられるために、普段のあそびと「こつぶっこ」での体験をリンクさせることがとても大事だということを学びました。

0～3歳の子どもたちとかかわっていると、通じあえる瞬間がたびたび訪れます。
生きものとのはじめての出会いや、生きものの構造の違いを、「羽や葉が、つるつるしてるね」「柔らかいね」「毛がもさもさしてるね」のように、言葉かけと身振りや表情で、通じ合ったな伝わったなと感じることが、私の喜びです。そして、その感覚を共有するかのように、子どもたちが私の手を引いて自分の発見を知らせてくれたことも何よりの喜びです。さまざまなアプローチを子どもたちにしながら、身近な自然が子どもたちにとって「知らない・怖い」ものではなく、「知って面白い」ものとして、認識され、安全なかかわり方を模索できるように、成長していってほしいなと願っています。

自然とかかわることは、住んでいる地域を感じることであり、日本や地球を感じることにつながっていると考えています。気候のいい時期に野原や公園を親子でおさんぽすることで、子どもたちは風や光を感じながら、草花や小石、小さな生きものの存在を感じていきます。時として自然は過酷で過ごしにくい部分もはらんでいますが、その対処法を知る上でも、どのような環境があるかを感じ、把握することはとても大事なことだと考えています。

0～3歳の自然体験は、身近な自然に目を向けられる貴重な時間だと考えています。
0～3歳の自然体験ができるイベントは、国内をみてもあまり多くありません。はじめて外界を理解し、人間の基礎を培うこの時期におこなう自然体験は、生きる力に結び付く機会となっていると思います。今後も保護者とのよりよい繋がりを築きながら、こつぶっこを継続していきたいと思います。

「こつぶっこ」をふりかえる

子どもから学ぶ自然観

三田市有馬富士自然学習センター
(キッピー山のラボ / コミュニケーター)
山中　詩子

地面の石と夢中になって遊ぶ子どもの姿に出会ったことが、実は私が当館のコミュニケーターというお仕事に惹かれた理由でした。長年、子どもの遊びの環境づくりに携わってきた私にとって、「遊びの環境としての自然」に興味を持ち、子どもがどのように自然と出会い自らかかわりをもっていくのか知りたかったからです。
4年間の「こつぶっこ」の取組みを通して沢山の気づきを得ることができました。

0～3歳の子どもは、特有のリズムや世界観があると感じています。だからこそ、この年齢で集うことに良さがあり、また、この時期に夢中になる遊びはいつか卒業するタイミングが訪れる貴重な時代であると捉えています。

私はこの年齢の子どもたちと交流する時、より身体的な感覚をひらいて空間と向き合い、表情やしぐさなどの非言語コミュニケーションを研ぎ澄まし、子どもたちを観てかかわることに意識を集中します。

「こつぶっこ」では、自然に対して観察し感受する力を磨くことができたように思います。今まで屋内での子どもの遊びの環境づくりに携わることが多かったので、自然という屋外での環境のとらえかたは新境地でした。太陽の光や風などの偶発的なものの影響を常にうけ、自分の想定を超える瞬間があるので、その中でうまれる遊びはより即興的なものとなります。子どもたちと共に過ごす時間の中で、子どもの言動のみえかた、自身の自然の捉え方が変化し、表現できることがより豊かになり感謝しています。なにより、子どもが自然の中でのびやかに動く時のなんともいえない自由な空間の広がりや一体感には心地よさを感じます。

私の経験からお伝えできることは、自身の自然への感動体験から子どもの体験に共鳴していくことが一番響き合えるということです。目の前の自然に対して、子どもが何に感動し夢中になっているのかが次第に読み取れるようになったからです。
それは子どもから学んだ自然の姿といえます。「こつぶっこ」での経験を通して、人生の生き方の土台となっていくような0～3歳に向けた自然体験は大変意味深いものであると考えます。こうした体験のひとつひとつが、日常の中で自然への愛着を育み、子どもが豊かに成長していくことに繋がると実感をもってこれから伝えていきたいと思います。

おやま から

うまれたあそび

三田市有馬富士自然学習センター

こつぶっこ

0～3さいのしぜんあそび

キッピー山のラボ
THE LABORATORY OF MtKIPPY

開館時間　9：00 ～ 17：00
休 館 日　毎週月曜（月曜祝日の場合は翌日）
　　年末年始（12 月 28 日～ 1 月 4 日）
住　　所　兵庫県三田市福島 1091-2
　　兵庫県立有馬富士公園内
T　E　L 079-569-7727

入館
無料

著者：山中 詩子・長谷川 真奈維　制作：山中 詩子・長谷川 真奈維・高橋 晃　発行：三田市有馬富士自然学習センター　発行日：2024 年 3 月